

**BRANCH 神戸学園都市に対する
JHEP 認証 [第 2 回更新]
審査レポート**

2025 年 7 月

BRANCH 神戸学園都市に対する JHEP 認証

〔第 2 回更新〕 審査レポート

評価申請者

名称 大和リース株式会社（代表取締役社長 北 哲弥）

住所 大阪府大阪市中央区農人橋 2-1-36 ヒップビル

申請番号

1-4207901-1501

評価実施者

名称 公益財団法人日本生態系協会（会長 池谷 奉文）

住所 東京都豊島区西池袋 2-30-20 音羽ビル

ハビタット評価認証制度 J H E P

JHEP（ジェイヘップ）は、米国連邦政府が開発した HEP という環境評価手法を、当協会が日本で適用可能な形に改良し、2008 年に創設したもので、事業を実施する前よりも生物の多様性の価値が向上した取り組みを、定量的に評価、認証する日本唯一の認証制度です。

自然の生態系は現代世代及び将来世代のもっとも大切な生存基盤です。その生態系の構成要素である生物の多様性は、私たちにとって遺伝子資源としても、なくてはならない基本財産です。その生物の多様性の価値がこれまで、漠然としたイメージで取り扱われてきました。

JHEP により、「動物のすみやすさ（HSI）」、「植生の地域らしさ（VEI）」という 2 つの指標を用いて数値化し、事業の前後を比較することで、生物の多様性の保全や再生の効果を明確に示すことが可能となりました。本認証は世界レベルの厳しい基準によるもので、消極的な環境への“配慮”では取得困難です。それだけに、認証を取得した取り組みは、社会に大きく貢献すると共に、世界へ発信可能な事業であると言えます。

目次

I .評価の概要	1
II .評価区域と基準年	4
1.評価区域	4
2.基準年	5
III .事業内容	6
1.事業の概要	6
2.緑地割合	12
IV .評価結果	13
1.保全再生目標等の設定	13
2.植栽植物等の確認（要件 3 の確認）	20
3.評価基準値の算出	21
4.事業によるハビタット得点の算出	25
5.更新年の 50 年後におけるハビタット得点（要件 2 の確認）	30
6.評価値（要件 4 の確認）	31
V .審査結果	35

I. 評価の概要

申請番号 1-4207901-1501

評価対象事業

名称 BRANCH 神戸学園都市
 所在地 兵庫県神戸市垂水区小東山手 2-2-1
 面積 18,156 m²
 概要 建物外構の植栽の入れ替え、維持管理

事業実施者

名称 大和リース株式会社（代表取締役社長 北 哲弥）
 住所 大阪府大阪市中央区農人橋 2-1-36 ピップビル
 問合窓口 神戸支店 流通建築リース営業所 営業課
 電話番号 078-291-0150

認証タイプ ハビタット評価認証 ver.3.0（JHEP ver.3.0）

基準年 2010 年

申請年 2015 年

更新年 2025 年

緑化条件 総敷地面積の 20%以上が緑地となる.

将来における緑地割合 25.7%

目標植生 カナメモチーコジイ群集／アベマキーコナラ群集／
 ホクチアザミーススキ群集／チガヤ群落

評価種 シジュウカラ／コムスジ／ショウリョウバッタ

評価結果

- 要件 2 ハビタット得点が将来までに 8 点以上となることが見込まれる。
- | | |
|---------------|-----------------------|
| 50 年後のハビタット得点 | 16.3 点 (得点範囲：0～100 点) |
| (内訳) 樹林 | 3.6 点 |
| 草地 | 12.7 点 |
- 要件 3 特定外来生物・未判定外来生物・生態系被害防止外来種を使用しない。
使用なし
- 要件 4 評価対象事業で得られる、更新年から 50 年間における年平均ハビタット得点が、評価基準値以上となる。
- | | |
|---------------|----------------------------|
| 評価基準値 | 0.9 点 (得点範囲：0～100 点) |
| 年平均ハビタット得点の増減 | +14.0 点 (得点範囲：-100～+100 点) |

認証可否 認証可

保全タイプ ハビタット代償保全および向上

評価ランク AA

総評

BRANCH 神戸学園都市は、商業施設でありながら、地域の生物多様性保全に貢献する空間づくりを目指しています。その取り組みの一環として、市民と協働で植栽の入れ替えや維持管理を行っています。

今回の認証更新では、樹木の入れ替えに当初の計画からの遅れが見られたものの、ヘデラからテイカカズラへの植え替えが進み、チガヤ群落も維持されていることが確認されました。この結果、評価値は前回の更新時よりもさらに向上し、+14.6 点（得点範囲：-100～+100 点）となりました。5 年後の次回更新時には、植え替えの計画がさらに具体的に進展していることが期待されます。

また、敷地内での取り組みに加えて、周辺の里山での環境改善などを通じて、評価値の移転制度を利用すれば、より高いランクを目指すことも可能です。

ESG 経営や SDGs に代表されるように、持続可能な経済・社会の実現に向けて、企業の役割がこれまで以上に注目されています。BRANCH 神戸学園都市が、今後も地域の生物多様性に貢献する取り組みを継続・発展させていくことを期待しています。

ガイドライン

ハビタット評価認証制度 考え方と基準 ver.3.0

評価認証機関

公益財団法人日本生態系協会

電話番号 03-5951-0244

認証日 2015 年 7 月 31 日

更新日 2025 年 7 月 31 日

有効期限 2030 年 7 月 30 日

認証番号 1-4207901-1501/02

Ⅱ. 評価区域と基準年

1. 評価区域

評価区域は兵庫県神戸市垂水区小束山手 2-2-1 に位置し、18,701 m²である（下図の赤枠内）。

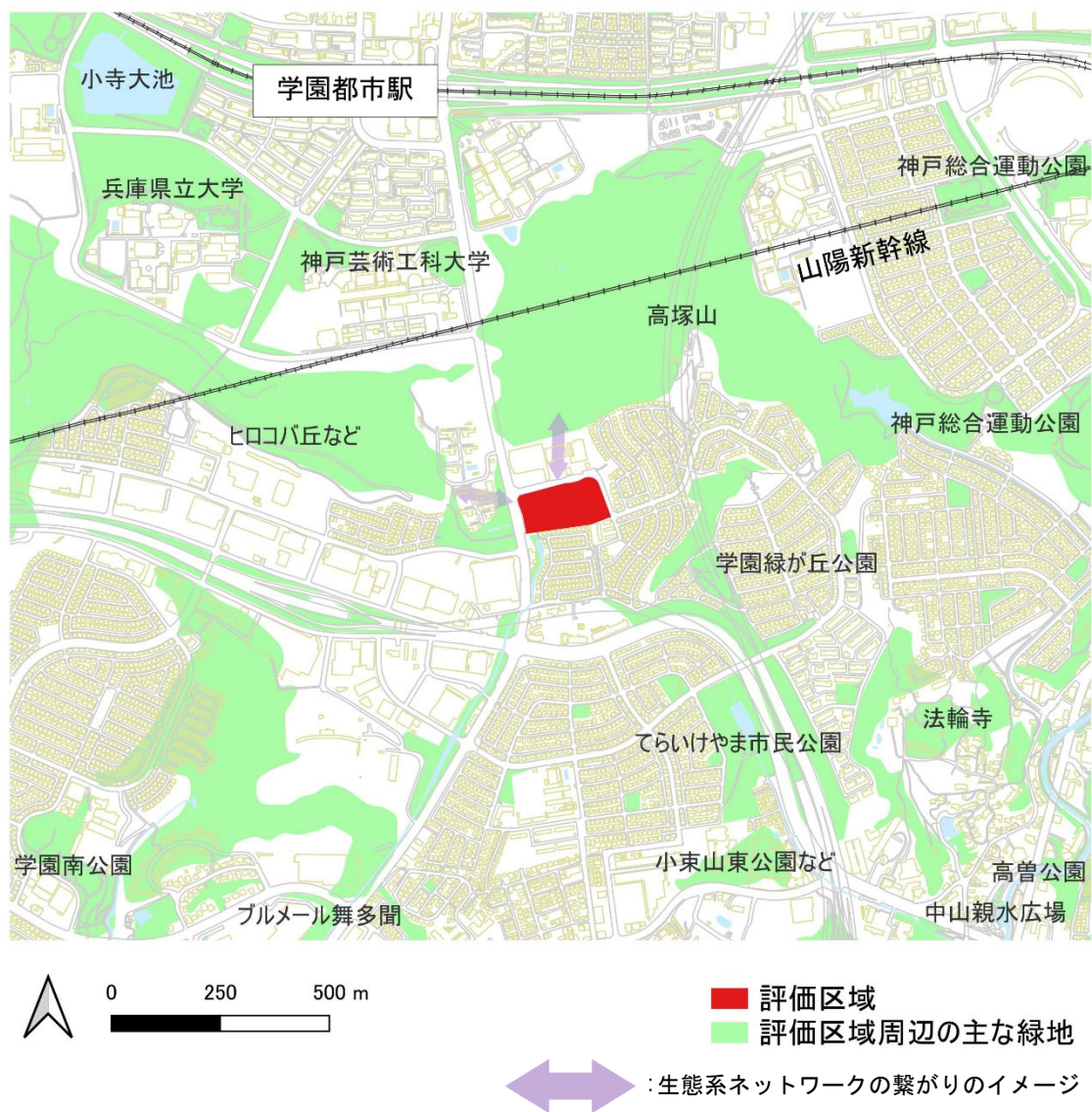


図. 評価区域(国土地理院発行の基盤地図情報 25000 および国土数値情報をもとに作成)

2.基準年

基準年は、土地取得年である 2010 年とする。

Ⅲ. 事業内容

1. 事業の概要

対象地は、神戸市営地下鉄学園都市駅から南へ約 1km、小束山手ニュータウンの入口に立地している。大和リース株式会社により土地が取得された後、2013 年 12 月に複合商業施設「BRANCH 神戸学園都市」としてオープンした。

同施設の周辺には、この地域の昔の面影を残す田畑や山林が今なお点在している。同社ではオープン直後から、自然保護に取り組む市民団体や自治会などとの交流を通じて、地域の豊かな自然への理解を深める活動に努めてきた。

そこで同社では「BRANCH 神戸学園都市」においても、買い物場だけにとどまらず、地域の生物多様性に貢献できる空間づくりを目指し、2015 年から順次、建物まわりの植栽の入れ替えおよび維持管理に取り組んでいる。かつての里山の風景を再現するため、市民団体や学識者との協働の下、近隣からの植物種子の採取・育苗や実生の移植が実施されている。

敷地東側の法面については、チガヤやススキなど様々な在来野草から成る草原を、建物まわりについては里山林をイメージし、コナラやカスミザクラ、ヤブムラサキなどの在来種を中心とした環境を目指している。また、建物の壁面や屋上の植栽についても、ティカカズラやチガヤなどへの入れ替えが順次行われている。

植栽については、将来の目標とする植生に応じた維持管理を行っていく。具体的には、敷地東側の法面についてはチガヤの播種を継続するとともに、年 1～2 回程度の刈り込みと、外来植物の積極的な駆除を行っていく。建物まわりの木々については、低木類・中木類は自然に成長させ、高木類は最大で高さ 15m 程度まで成長させるものとし、一律に整枝・剪定を行うのではなく、自然樹形に近づくように管理する計画となっている。

名称	BRANCH 神戸学園都市
敷地面積	18,156 m ²
延床面積	20,059 m ² （駐車場棟除く）
構造	鉄骨造 地上 2 階／地下 1 階建
用途	コミュニティ型複合商業施設
竣工	2013 年 11 月
環境対策	自然共生サイト認定、「TSUNAG 認定」認定



図. 正面アプローチ（2025 年撮影）



図. 東側法面で再生中のチガヤ群落（2025 年撮影）



図. 園芸種から在来種のテイカカズラに転換（2025 年撮影）



図. 近隣の里地里山から採取した地域在来の植物の種子や実生を敷地内で育成（2025 年撮影）

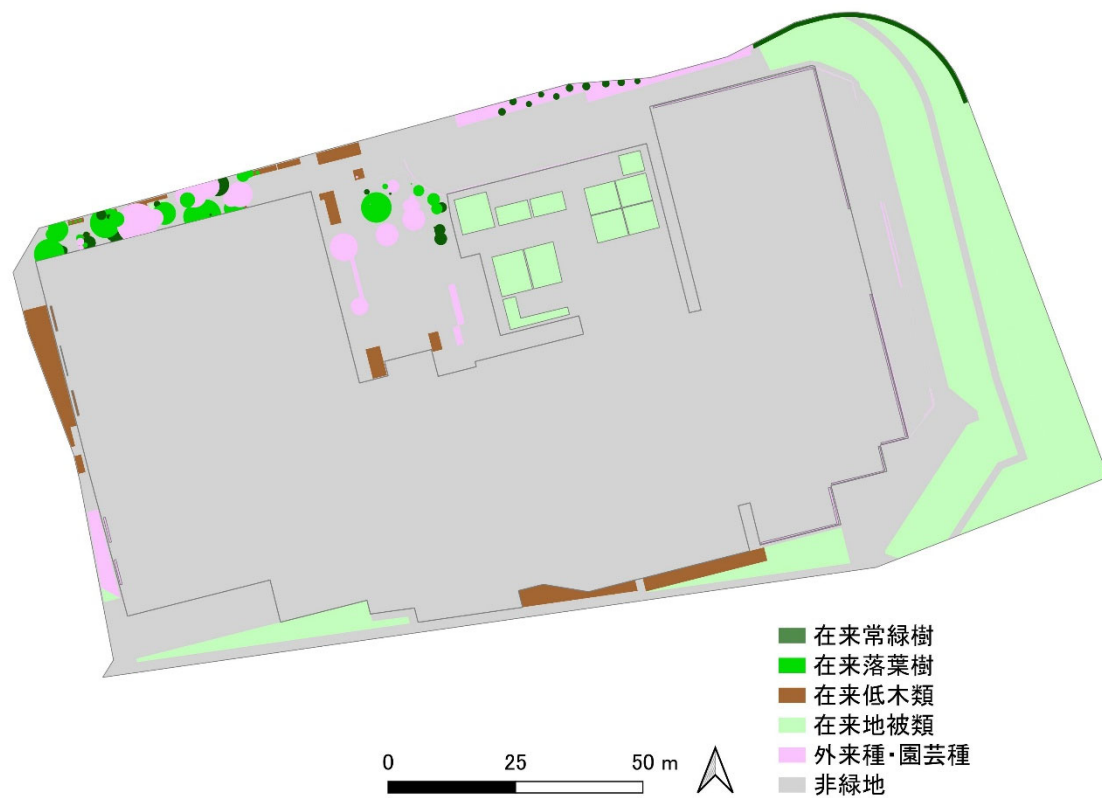


図. 2025 年までにおける植生等の分布

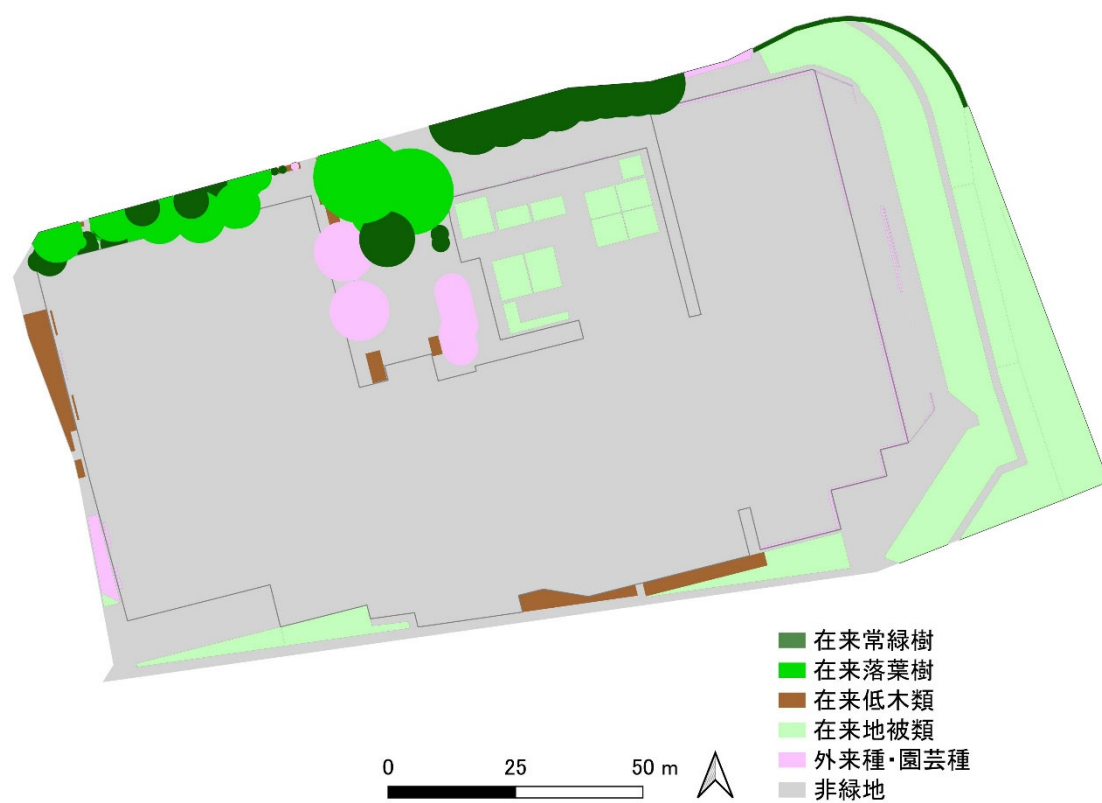


図. 2075 年における植生等の分布

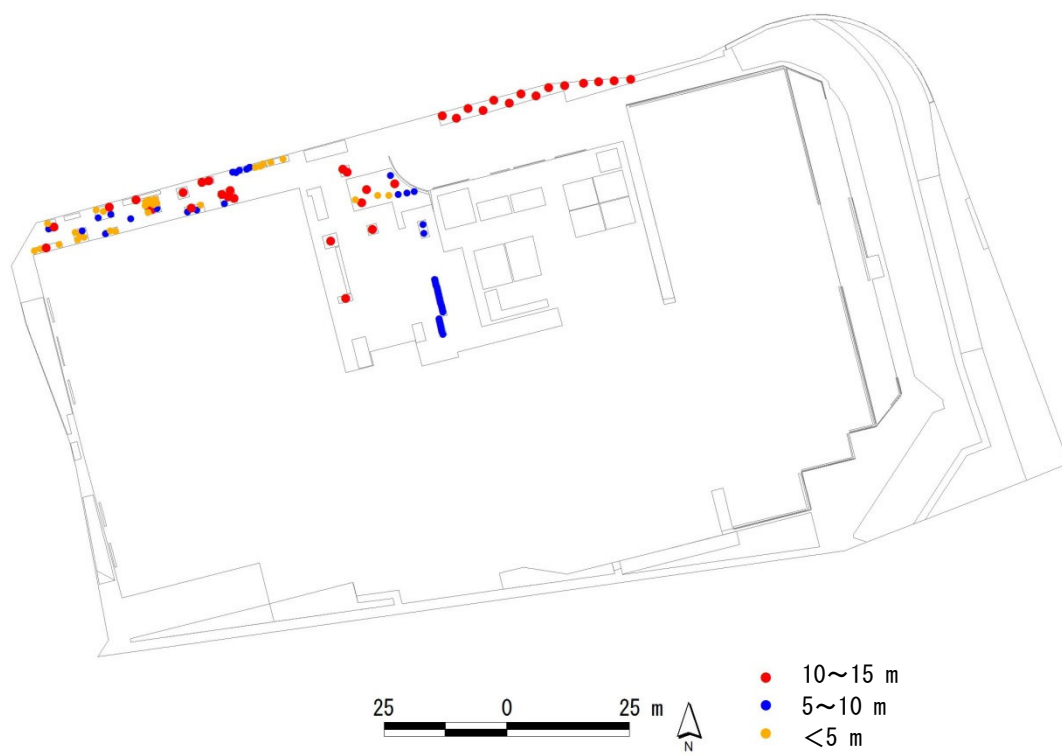


図. 管理上予定している将来樹高

2.緑地割合

JHEP の定義に従った当該評価区域の緑地割合は 25.7%であり、JHEP 認証に関する緑化条件は満たされている。

IV. 評価結果

1. 保全再生目標等の設定

1-1. 保全再生目標

植生については、評価対象地において成立しうる自然植生の系列に基づいた在来の植生の保全・再生を目標とする。動物に関しては、評価区域の立地条件および設定された目標植生に生息し、希少性や固有性、栄養段階などの高い種や人為影響を受けやすい種などを中心として保全を図ることを目標とする。

1-2. 基準年から過去 30 年間の状況

基準年（2010 年）から過去 30 年間（1980 年～2010 年）のハビタットの状況を、複数年代の空中写真を用いて把握した。

判読の結果、1979 年、1985 年および 1989 年時点では主に低木・草地が広がり、一部に樹林や裸地が確認された。1990 年からは神戸研究学園都市の開発に伴う土地区画整理事業が本格化し、2010 年に至るまで全面が裸地の状況が続いていた。

1-3.環境タイプの分布状況

JHEP では「環境タイプ」という概念を設けている。環境タイプは、ランクの高い順に「1. 湿性環境、樹林」－「2. 低木・草地・竹林」－「3. 人工地」と定義している。対象地内を環境タイプで区分し、単位区画ごとに、原則として基準年以前の30年間と初回申請年以前の30年間が重なる期間（環境タイプ設定期間）における環境タイプの変遷を確認する。その期間で最も高いランクの環境タイプを、その単位区画における基準年以前の環境タイプとしている。

1-2 における空中写真の判読の結果、1980 年から 2010 年では、環境タイプ 1 から 3 までのタイプが確認された。基準年以前で最も高い環境タイプの面積割合は、樹林タイプが 7.8%、低木・草地・竹林タイプが 55.6%、人工地タイプが 36.6%であった。

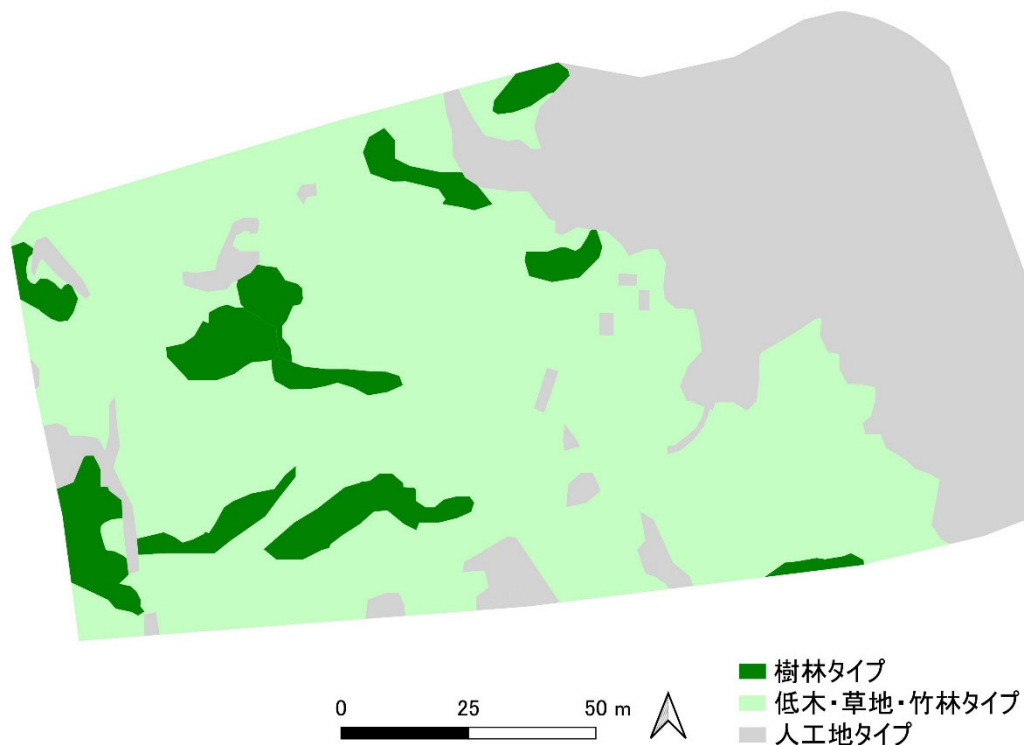


図. 基準年以前における環境タイプの分布

1-4. 自然植生の遷移系列

対象地を含む当該地域の地形や気候条件から、自然植生に至る遷移系列について整理した。

神戸市の地形は、六甲山系により南北に二分されている。大阪湾に面した南側は、六甲山系の山麓部とそこから流れ出る中小河川、扇状地、海岸低地等によって構成されている。全般的には瀬戸内海型の気候に区分されるため、特に南側海岸付近は瀬戸内海の影響を受けて温暖な地域となっている。

垂水区は神戸市の南側に位置しており、塩屋谷川、福田川、山田川などの谷筋とその間に広がる丘陵地で形成されている。対象地は表六甲水系、二級河川の山田川上流部、標高115m 前後に位置している。

近畿地方のこうした条件下における自然植生は、カナメモチーコジイ群集と判断される（宮脇編 1984*）。カナメモチーコジイ群集は、中部地方以西の乾性立地に成立する常緑広葉樹林である。コジイが優占し、アラカシ、ウラジロガシ等のカシ類が混生し、時にスダジイ、タブノキを伴う。

当該地域におけるカナメモチーコジイ群集の代償植生は、アベマキーコナラ群集と判断される（宮脇編 1984*、鈴木 2001†）。アベマキーコナラ群集は、瀬戸内海沿岸に分布する高さ 6～18m の二次林で、高木層にアベマキあるいはコナラが優占し、アラカシ、エゴノキ、アカシデ、ナラガシワ等が混生する。

先駆的二次林としては、クサギーアカメガシワ群団が考えられる。

二次草原としては、チガヤ群落とホクチアザミーススキ群集が成立する。チガヤ群落はチガヤを主な構成種とし、上記樹林タイプの成立する環境下で、定期的な刈り込みや火入れといった人為的攪乱により、樹林化が妨げられている場合に成立する。攪乱強度の低下に伴って、ススキが優占するホクチアザミーススキ群集へと移行する。

*宮脇昭（編）（1984）日本植生誌 5 近畿．至文堂，東京．

†鈴木伸一（2001）日本におけるコナラ林の群落体系．植生学会誌 18：61-74．

以上を次表に整理した。

表. 自然植生に至る遷移系列の推定

遷移段階	群集名	環境タイプ
極相林	カナメモチーコジイ群集	樹林タイプ
二次林	アベマキーコナラ群集	
先駆的二次林	クサギーアカメガシワ群団	低木・草地・竹林タイプ
二次草原	ホクチアザミーススキ群集 チガヤ群落	

1-5.目標植生

遷移段階の分析より、本事業において目標とする植生群集と面積は、樹林タイプとしてカナメモチーコジイ群集を 338 m²、アベマキーコナラ群集を 1,618 m²、低木・草地・竹林タイプとしてホクチアザミーススキ群集を 10 m²、チガヤ群落を 9,562 m²と設定した。残りは、建物や駐車場などの人工地である。

目標植生の分布を下图に示した。

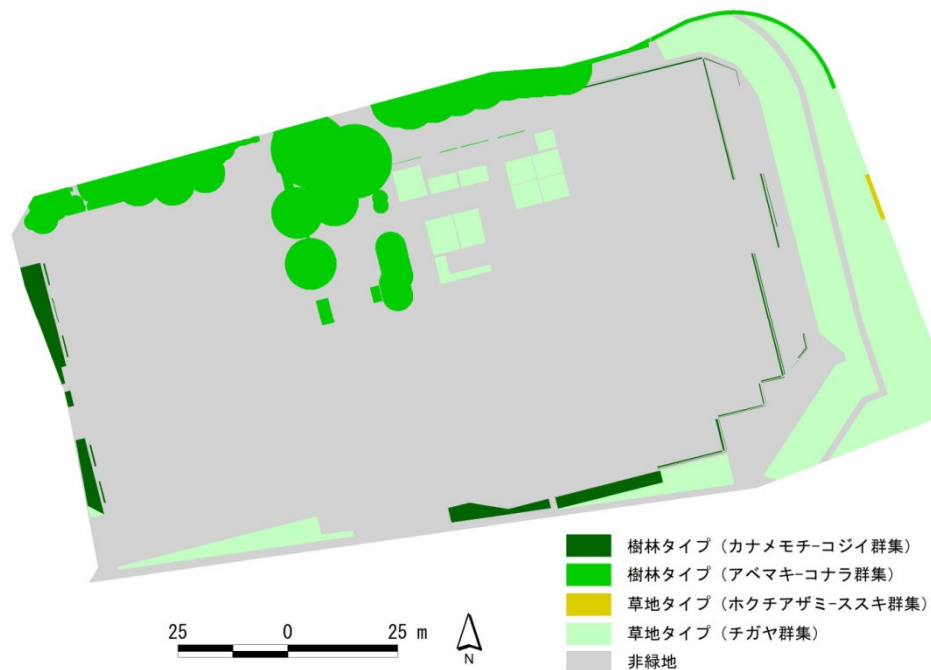


図. VEI 算出のための目標植生の配置状況
(緑地として維持していく区域のみを表示)

基準年以前と事業計画および設定された目標のそれぞれにおける環境タイプの面積割合を下図に示した。

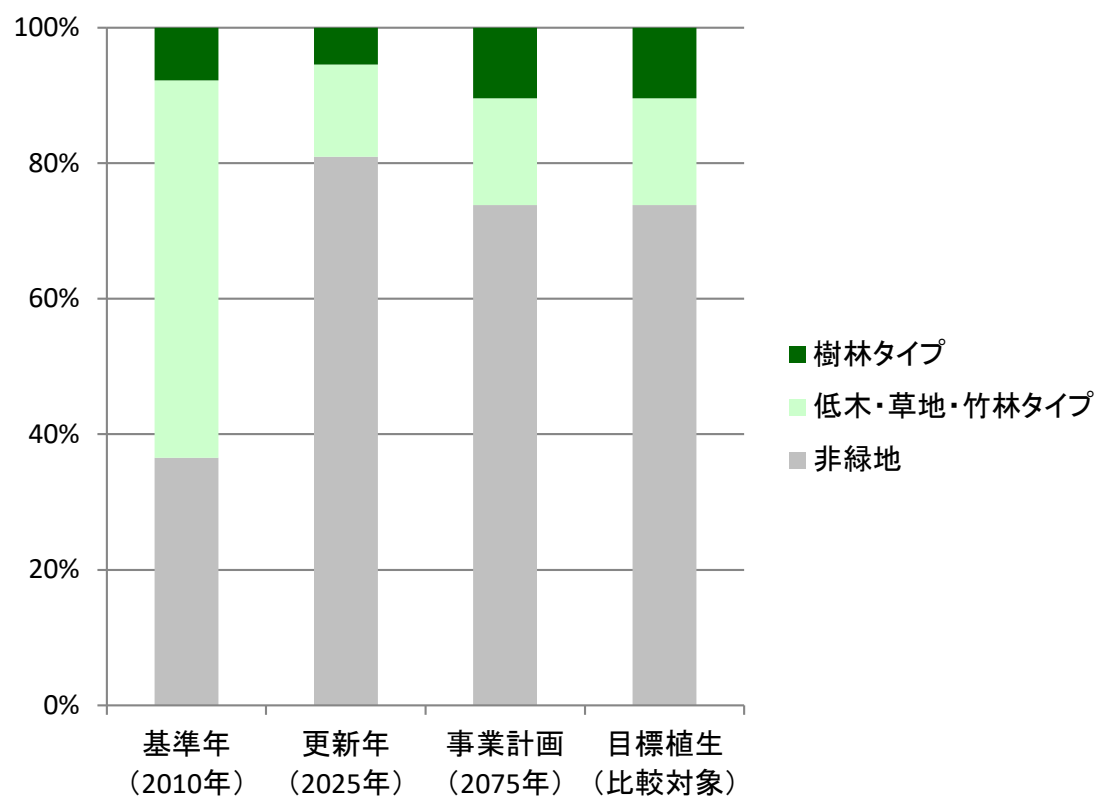


図. 環境タイプの面積割合

1-6.評価種の選定

(1) 選定プロセス

評価種は、樹林タイプについてはカナメモチーコジイ群集およびアベマキーコナラ群集に生息する種を含む分類群の中から、低木・草地・竹林タイプについてはホクチアザミーススキ群集およびチガヤ群落に生息する種を含む分類群の中から、それぞれ選定することとした。また、効率的に分析を進めるため、HSI モデルがすでに開発されている種、または十分な生態情報が存在する種を対象とした。その結果、鳥類と昆虫類から選定することとなった。

本事業の規模は約 2ha であり、対応する行動圏クラスは 1～3 となる。鳥類と昆虫類（チョウ類、バッタ類）それぞれの中から、この行動圏クラスに該当する動物種を抽出した。

(2) 選定結果

樹林の評価種としては、鳥類のシジュウカラおよび昆虫類（チョウ類）のコミスジが選定された。草地の評価種としては、昆虫類（バッタ類）のショウリョウバッタが選定された。

2.植栽植物等の確認（要件 3 の確認）

本事業において、審査を実施した時点における生態系被害防止外来種リストに掲載されている生物、および未判定外来生物との照合を行い、問題がないことを確認した。

3.評価基準値の算出

3-1.方法

評価基準値は、基準年（2010 年）から過去 30 年間ににおける状況に基づいて設定される。1-2 における空中写真の判読の結果、対象地においては、過去 30 年間ににおけるハビタット得点の平均値の方が、基準年の値よりも高いことが分かった。このため、過去 30 年間の平均値を 50 年間累積した値を採用した。VEI（植生評価指数、植生の地域らしさ）および HSI（ハビタット評価指数、動物評価種のすみやすさ）は、以下のように推定した。

(1) VEI

空中写真から、植栽樹群（高木類）、低木類、草地の 3 つの相観植生に区分し、GIS データとして整理した。これらの VEI 値については、日本植生誌近畿（宮脇編 1984*）および当協会が独自に取得したデータを参考に算出した。

評価区域全体の VEI は、相観植生ごとの VEI を面積で加重平均して算出した（植生が存在しない区域の VEI は 0 とした）。

(2) HSI

3-1 (1) で区分した相観植生について、樹冠サイズや周辺の状況等から樹高を推定し、それぞれの被度を算出した。当協会が独自に取得したデータを参考にし、高木林については、HC（階層別植物被度）1～2 層に該当する被覆部の被度を 80%、HC3～4 層に該当する被覆部の被度を 40%、亜高木林については、HC2 層に該当する被覆部の被度を 80%、HC3～4 層に該当する被覆部の被度を 40%、低木林については、HC3 層に該当する被覆部の被度を 80%、HC4 層に該当する被覆部の被度を 40%、草地については、HC4 層の被度を 80%とした。

得られた HC を面積で重みづけして全体の平均値を求め、これをもとに評価区域全体でのハビタット変数を算出した。ハビタット変数を HSI モデルに代入し、HSI を求めた。得られた HSI を該当する環境タイプ（樹林タイプまたは草地タイプ）の面積比率で割った値を「環境タイプ内の HSI (HSI_{hab})」とした。HSI_{hab}に 100 を乗じた値を「環境タイプ内のハビタット得点 (HS_{hab})」とし、HS_{hab}に該当する環境タイプの面積比率を乗じたものを「ハビタット得点 (HS)」とした。

3-2.結果

評価種および植生ごとに、基準年（2010 年）におけるハビタット得点を 50 年間延長したものを下図に示した。

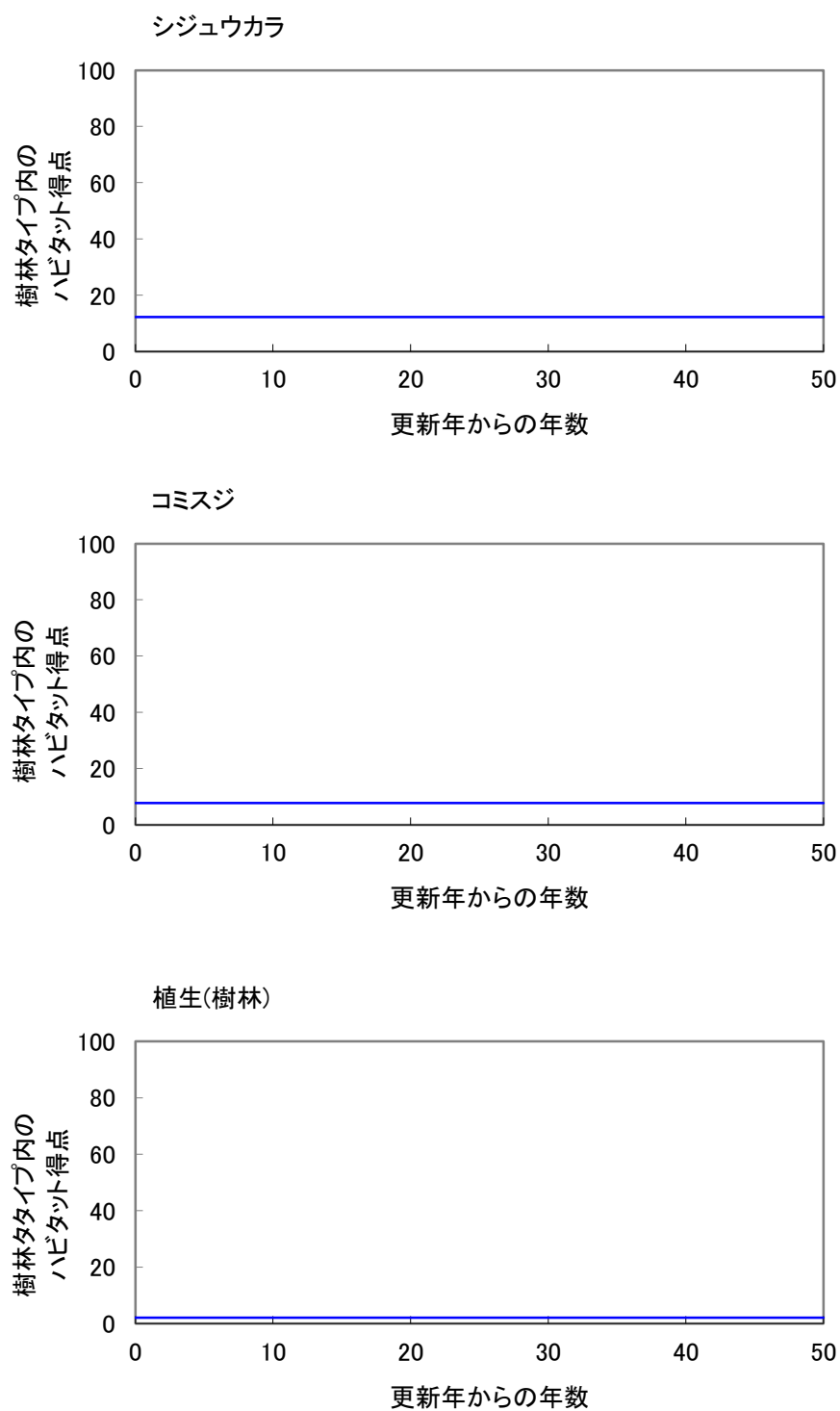


図. 評価種および植生ごとの評価基準値

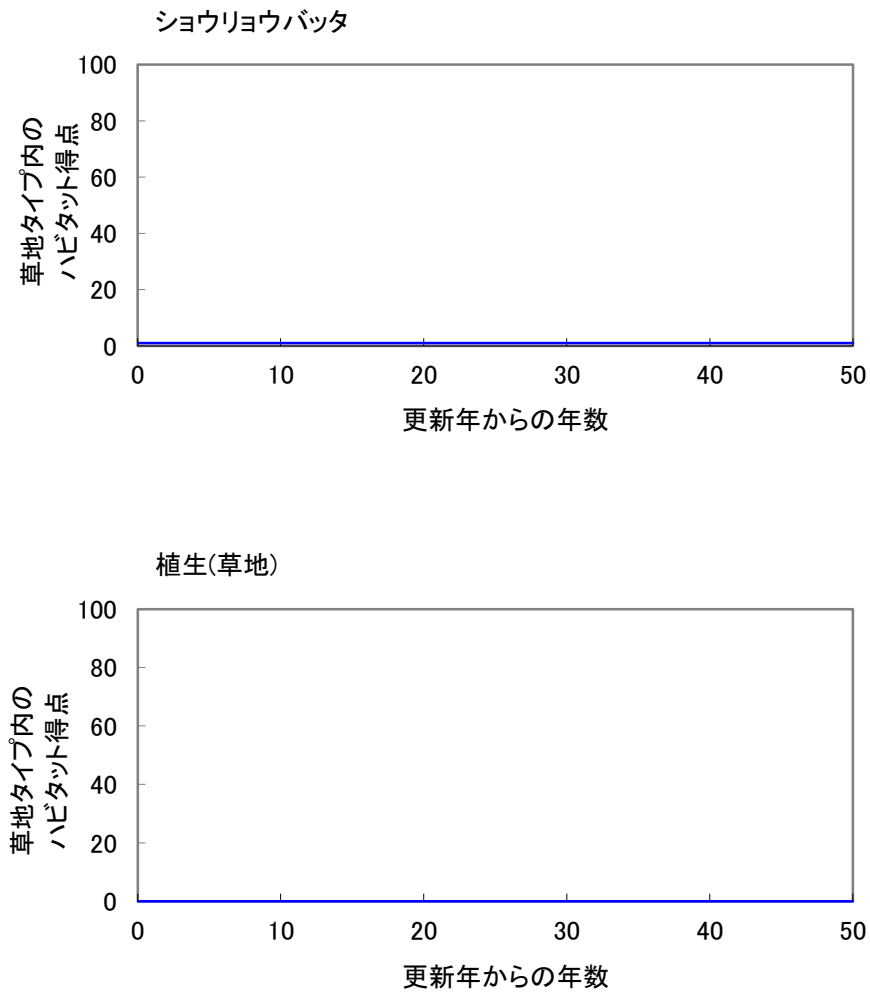


図. 評価種および植生ごとの評価基準値

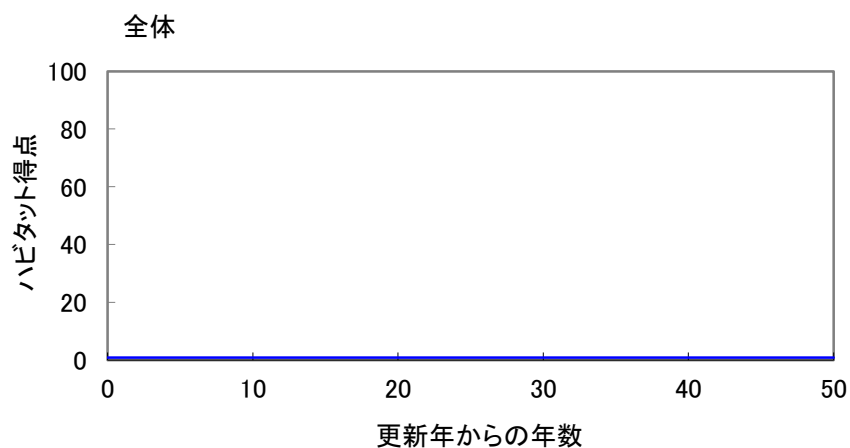


図. 全体での評価基準値

評価基準値を下表に示した。

表. 評価基準値

目標環境タイプ	面積比率	分類群	評価種	環境タイプ内の 年平均ハビタット得点	年平均 ハビタット得点*
樹林	0.105	動物	シジュウカラ	12.2	1.3
			コミスジ	7.7	0.8
			動物平均 F1	10.0	1.0
		植生 F2		2.1	0.2
		樹林の平均 F = (F1+F2)/2		6.0	0.6
草地	0.530	動物	ショウリョウバッタ	1.0	0.5
		植生 G2		0.0	0.0
		草地の平均 G = (G1+G2)/2		0.5	0.3
非緑地	0.365			0.0	0.0
全体					0.9

* 環境タイプ内の年平均ハビタット得点に目標環境タイプの面積比率を乗じた値

4. 事業によるハビタット得点の算出

4-1.方法

BRANCH 神戸学園都市では、2015 年から順次、建物まわりの植栽の入れ替えおよび維持管理が行われている。かつての里山の風景を再現するため、市民団体や学識者と共同で、近隣からの植物種子の採取・育苗や実生の移植が行われる計画である。

敷地東側の法面

- ・ チガヤやススキなどを中心とした在来植物への入れ替え。
- ・ チガヤの播種（およそ 1 m²×20 箇所／年）による、チガヤ群落の拡大を継続する。
- ・ 2 回/年の草刈りによるチガヤ群落の維持を継続する。
- ・ 外来種（オオキンケイギクやセイタカアワダチソウなど）の除去を継続する。

南側外構

- ・ チガヤの播種を行い、チガヤ群落を再生する。
- ・ 2 回/年の草刈りによるチガヤ群落を維持する。
- ・ チガヤ播種や草刈りの際に外来種を駆除する。

建物屋上

- ・ チガヤ等を中心とした在来植物への入れ替え。（2030 年までを目処）
- ・ 入れ替えた在来の野草の定着後は、状況に応じた刈り込みを実施していく。
- ・ 外来植物の継続的駆除。

北側外構・植栽枡

- ・ 外来種、園芸種の選択的除去およびコナラなどの在来植物の補植を行い、在来植生への転換を継続する。（2030 年までを目処）
- ・ 低木・中木類は自然に成長させ、高木類は最大で高さ 15m 程度まで成長させていく。
- ・ 一律に整枝・剪定を行うのではなく、自然樹形に近づくように管理していく予定。

北側壁面緑地

- ・ 外来種、園芸種（ヘデラ等）の選択的除去および在来植物（テイカカズラ等）の補植を行い、在来植生への転換を図る。

各植栽木の樹高および樹冠半径は、樹木の成長モデル（2008 年 12 月版）から予測した。その結果、対象地の植栽木は、2055 年（更新年の 30 年後）に管理上予定している最大樹高に至ると予測された。

以上より、VEI および HSI は、2025 年（更新年）、2030 年（更新年の 5 年後）、2055 年（更新年の 30 年後）、2075 年（更新年の 50 年後）の 5 時点を算出した。

(1) VEI

B1～K 層に該当する植物種ごとの被度割合を算出し、VEI を求めた。評価区域全体の VEI は、相観植生ごとの VEI を面積で加重平均して求めた（植生が存在しない区域の VEI は 0 点とした）。

(2) HSI

各樹種の樹冠および地被類や低木類の植え込みを GIS 上に図化し、HC1～HC4 層の各階層における被覆割合を算出した。階層ごとの植物被度は、当協会が独自に取得したデータを参考に被覆割合の 80%とした。

4-2.結果

得られた HSI と VEI に 100 を乗じて、各時期におけるハビタット得点を求めた。その推移を下図に示した。

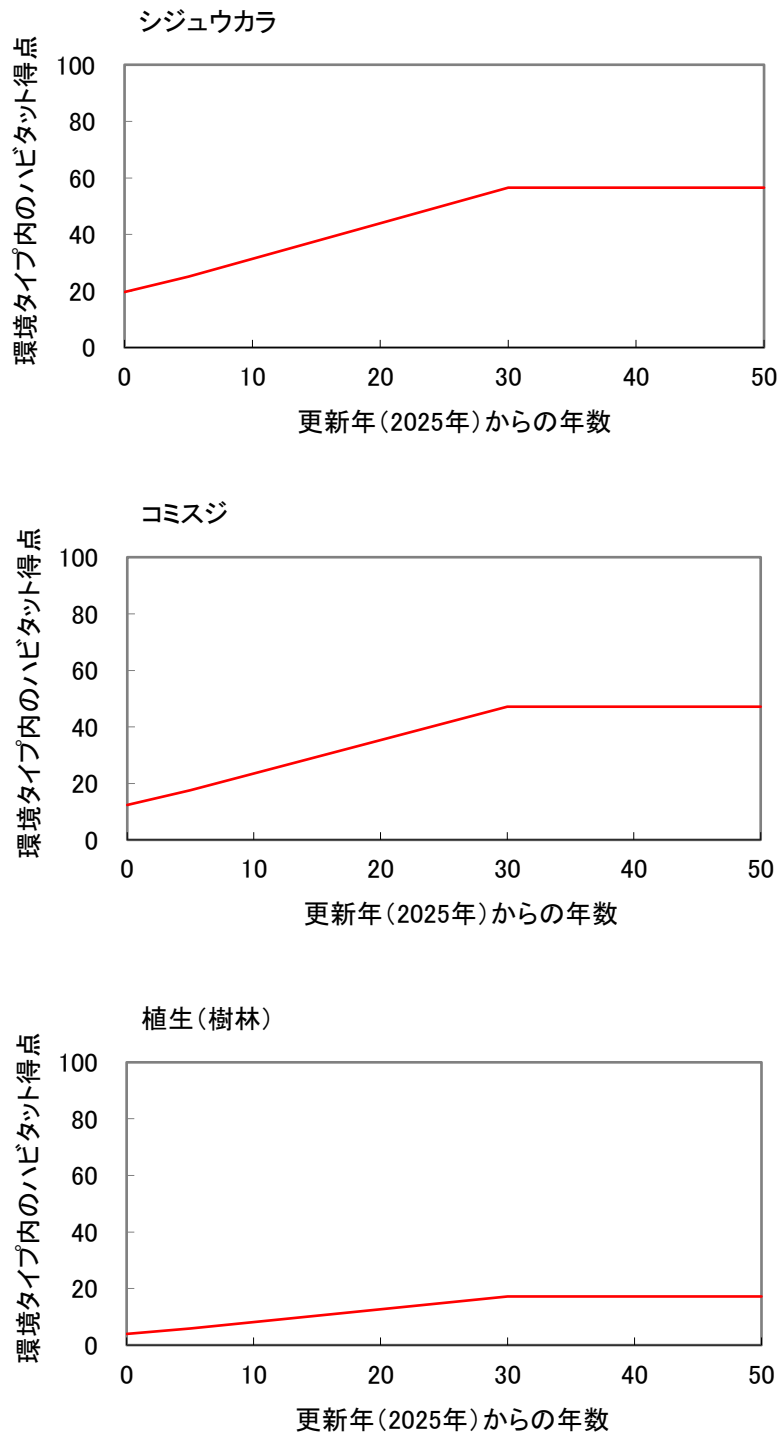


図. 事業により得られる評価種および植生ごとのハビタット得点の推移

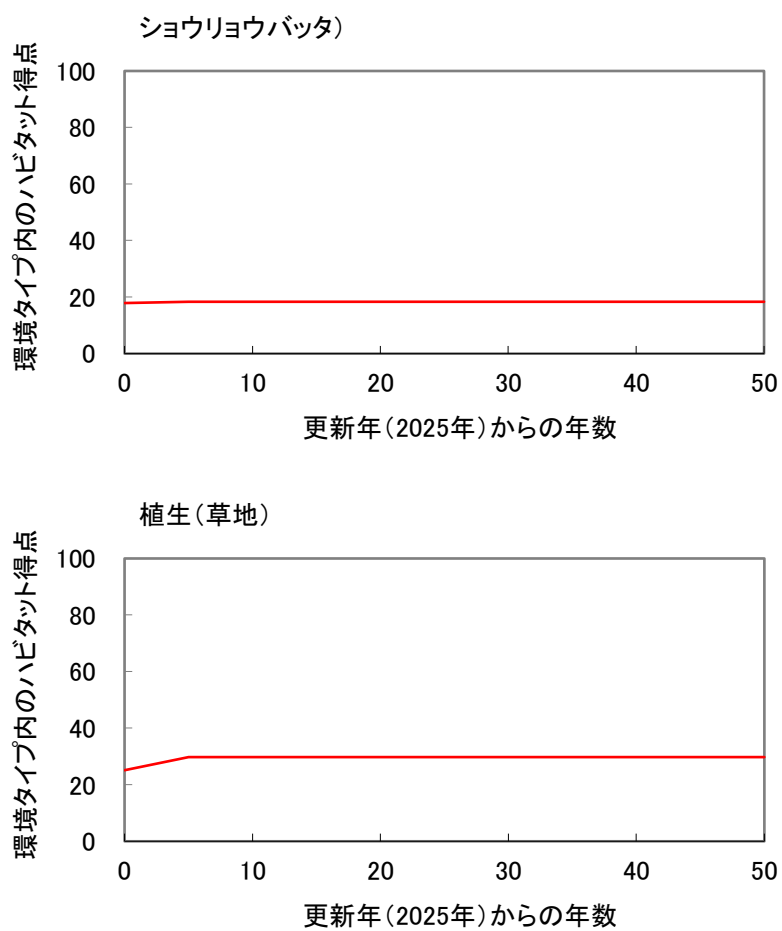


図. 事業により得られる評価種および植生ごとのハビタット得点の推移

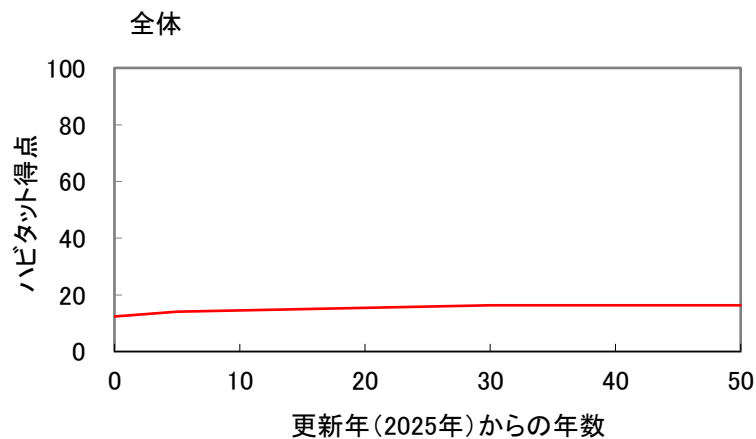


図. 事業により得られる全体でのハビタット得点の推移

本事業により得られると予想された年平均ハビタット得点を下表に示した。

表. 事業により得られる年平均ハビタット得点

目標環境タイプ	面積比率	分類群	評価種	環境タイプ内の 年平均ハビタット得点	年平均 ハビタット得点*
樹林	0.105	動物	シジュウカラ	45.2	4.7
			コミスジ	36.5	3.8
			動物平均 F1	40.9	4.3
		植生 F2		13.1	1.4
		樹林の平均 $F = (F1+F2)/2$		27.0	2.8
草地	0.530	動物	シヨウリョウバツタ	18.3	9.7
		植生 G2		29.4	15.6
		草地の平均 $G = (G1+G2)/2$		23.9	12.7
非緑地	0.365			0.0	0.0
全体					15.5

* 環境タイプ内の年平均ハビタット得点に目標環境タイプの面積比率を乗じた値

5.更新年の 50 年後におけるハビタット得点（要件 2 の確認）

更新年（2025 年）の 50 年後における HSI と VEI に 100 を乗じて、各評価種と植生のハビタット得点を求め、下表に整理した。

表. 50 年後のハビタット得点

目標環境タイプ	面積比率	分類群	評価種	環境タイプ内の ハビタット得点	ハビタット得点*
樹林	0.105	動物	シジュウカラ	56.5	5.9
			コミスジ	47.2	4.9
			動物平均 F1	51.8	5.4
		植生 F2		17.2	1.8
		樹林の平均 $F = (F1+F2)/2$		34.5	3.6
草地	0.530	動物	ショウリョウバッタ C	18.4	9.7
		植生 G2		29.7	15.7
		草地の平均 $G = (G1+G2)/2$		24.0	12.7
非緑地	0.365			0.0	0.0
全体					16.3

* 環境タイプ内のハビタット得点に目標環境タイプの面積比率を乗じた値

6.評価値（要件 4 の確認）

4 で求めた事業により得られる年平均ハビタット得点から、3 で求めた評価基準値を引くと、評価値は以下の通りとなった。

表. 評価結果

目標環境タイプ	面積比率	分類群	評価種	評価値*
樹林	0.105	動物	シジュウカラ	+3.5
			コムスジ	+3.0
			動物平均 F1	+3.2
		植生 F2		+1.1
		樹林の平均 $F = (F1+F2)/2$		+2.2
草地	0.530	動物	ショウリョウバッタ	+9.2
		植生 G2		+15.6
		草地の平均 $G = (G1+G2)/2$		+12.4
非緑地	0.896			0.0
全体				+14.6

* 事業により得られる年平均ハビタット得点から評価基準値を引いた値

評価種および植生ごとに、評価基準値（青色）とハビタット得点（赤線）の推移を下図に示した。

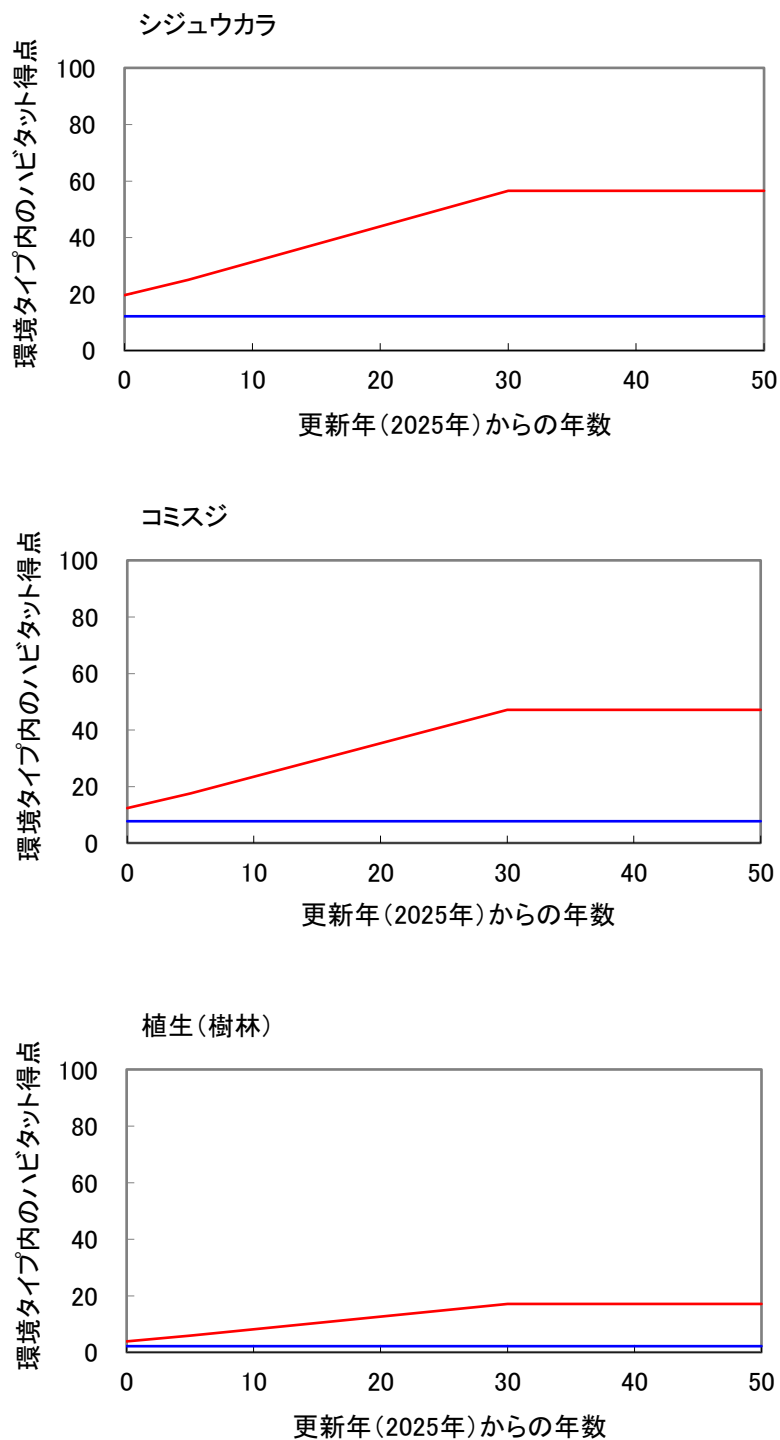


図. 評価種および植生ごとの評価基準値とハビタット得点の推移

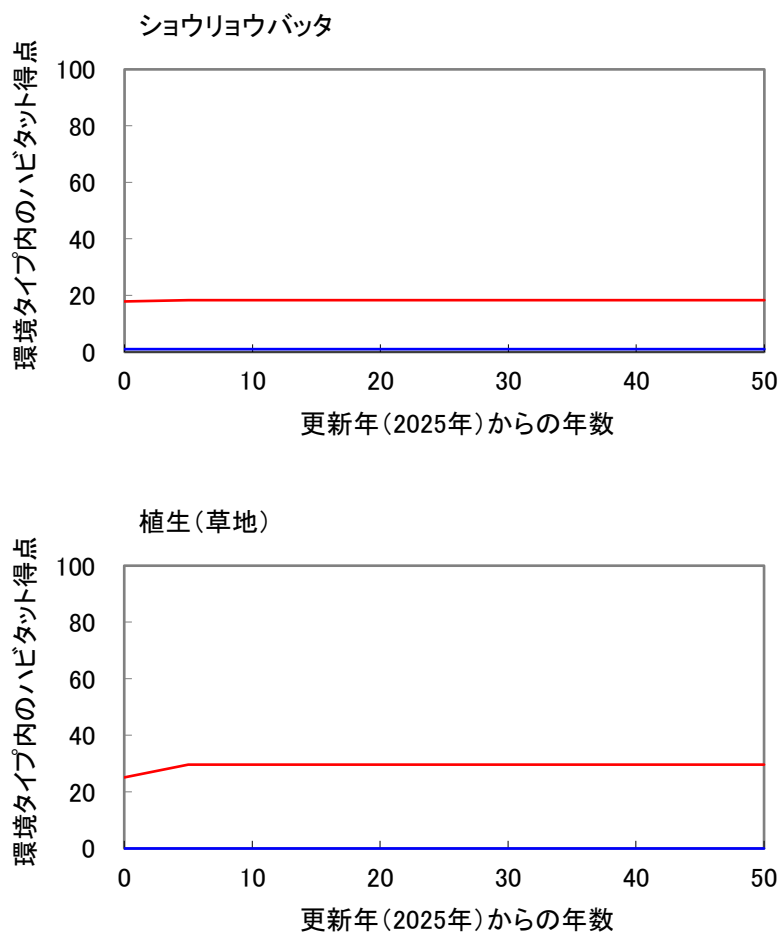


図. 評価種および植生ごとの評価基準値とハビタット得点の推移

全体における評価基準値（青線）とハビタット得点（赤線）の推移を下図に示した。

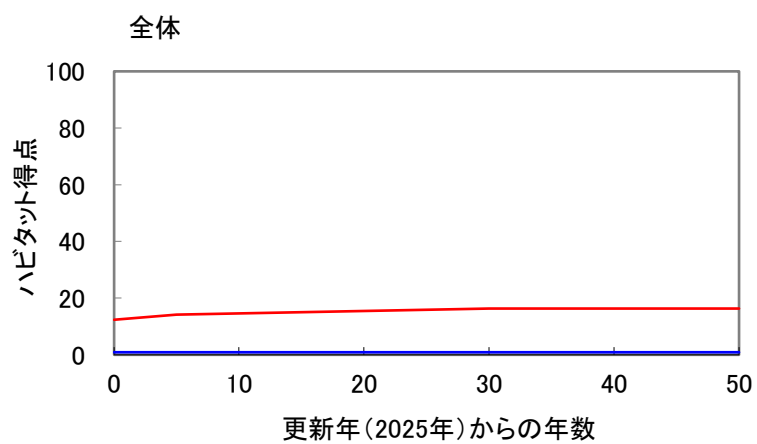


図. 全体での評価基準値とハビタット得点の推移

V. 審査結果

IV章の結果に従い、認証要件ごとの結果を以下に整理する。

要件 2（ハビタットの質要件）

ハビタット得点が将来 8 以上となることが見込まれる。なお、条件によっては、他のサイトにおいて得られた評価値の一部またはすべてを、評価対象事業に移転すること（オフサイト代償）で、本要件を満たすことも可能である。

更新年（2025 年）の 50 年後におけるハビタット得点は 16.3 点と予測された。そのため、本事業は要件 2 を満たすものと認める。

要件 3（外来種要件）

生態系被害防止外来種・未判定外来生物を使用しない。

本事業において、審査を実施した時点における生態系被害防止外来種リストに掲載されている生物、および未判定外来生物との照合を行い、問題がないことを確認した。このため、本事業は要件 3 を満たすものと認める。

要件 4（更新要件）

評価対象事業で得られる、更新年から 50 年間ににおける年平均ハビタット得点が、評価基準値以上となる。なお、ここで得られた年平均ハビタット得点を前回認証時の年平均ハビタット得点から引いた値は 10 以下である必要がある。

本事業において、更新年から 50 年間ににおける年平均ハビタット得点は、評価基準値（0.9 点）を 14.6 点上回った。また、本事業により得られる年平均ハビタット得点 15.5 点を前回認証時の年平均ハビタット得点 14.9 点から引いた値は 10 以下となった。このため、本事業は要件 4 を満たすものと認める。

認証の可否と認証種別および評価ランク

以上より、本申請事業は認証要件をすべてクリアし、JHEP 認証事業に該当することを認める。保全タイプと評価ランクは以下の通りである。

認証可否 認証可

保全タイプ ハビタット代償保全および向上

評価ランク AA

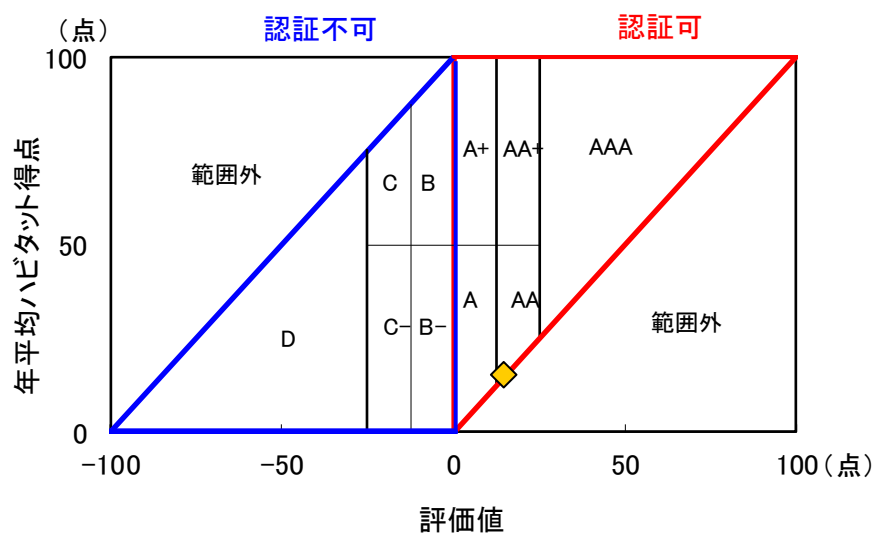


図. 本事業の評価ランク

※本事業は、横軸（評価値）が 14.6 点、縦軸（年平均ハビタット得点）が 15.5 点となる座標に位置する（図の黄色◇）。このため、評価ランクは AA に相当する。

BRANCH 神戸学園都市に対する
JHEP 認証 [第 2 回更新]
審査レポート

2025 年 7 月発行

編集 公益財団法人日本生態系協会

発行 公益財団法人日本生態系協会

〒171-0021

東京都豊島区西池袋 2-30-20 音羽ビル

電話 03-5951-0244

URL www.ecosys.or.jp/

* 禁無断転載・複製

© (公財)日本生態系協会 2025